

かるたには、世代や言葉の壁を超えた交流を可能にする力がある。

「福祉の視点でかるたに」の思いからスタートした

—すぎなみKarutaプロジェクトはどのような活動を行う団体ですか？

荻本：障害者交流と国際交流を主なテーマに、さまざまなかるたを制作し、かるたを通して人や文化の交流を図る団体です。以前、仕事関係でかるた作りのワークショップを行った際、絵と言葉による相乗効果が面白いと感じ、杉並区でもやってみようと思いつきました。

高橋：私は仕事の傍ら、地域活動として障害のある方たちと長く関わり続けてきました。彼らが自分の思いを伝えるような場が何かないかな？と考え、荻本さんにかるた作りを相談したことで、プロジェクトに参加することになりました。

種岡：私も地域活動の中で障害がある方のお付き合いがあり、高橋さん同様、患者さんやご家族が気持ちや情報を発信する手段として、かるたは面白いなと考えたのが参加のきっかけです。

荻本：地域活動の先輩でもあるお二人に出会い、平成29年にプロジェクトはスタートしました。そして最初にできあがったのが、さまざま

な障害がある方へのインタビューを経て制作した「人・まち思いかるた」と、区内の名所・旧跡などを取り上げた「すぎなみグリーンかるた」です。グリーンかるたは区民の皆さんと一緒に制作したのですが、小さなお子さんが描いた絵札に高齢の方が読み札をつけるなど、世代を超えて取り組めたことがよかったです。



荻本：プロジェクトを進める中、海外でかるた作りをしている方と知り合う機会があり、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催も決まっていたので、世界の人たちとかるたを作ることで交流できたら素晴らしいなと思って「グローバルかるた」というものを企画しました。



種岡：インターネットで作品を募集したところ英語圏を中心に約30カ国から、年間約400～500点、4年間で約2000点が集まりました。郵送で原画が届くこともあるのですが、それを目にすると感動するものがあります。

高橋：自分の国のことを題材にする人もいれば、そうじゃない人もいるのが面白いんですよ。

荻本：海外から募集するほか、区内の高校の先生や生徒さんにもアイデアをいただき、作品を30数点選定してかるたとして整え、これまで4セット制作しました。また、応募作品から東京2020大会に参加予定の206カ国を集めた「200カ国かるた」も完成しています。

高橋：作品をかるたに落とし込んでいく過程で、情報として不足している部分は調べる必要があるため、世界の国々に関する知識が身に付きます。それがこの活動の魅力でもあります。

—東京2020大会で杉並区がホストタウンとして迎えるウズベキスタン、パキスタンのかるた作りにも挑戦したそうですね。

高橋：区から最初にお話をいただいた時は「どこにある国だっけ…!？」と想像もつかなかったのが正直なところでした。同時にわくわく感も湧いてきました。

種岡：制作にあたり考えたのが、観光ガイドの情報に頼るのではなく現地でご覧になる人々の実生活により近い情報を得たいね、ということ。地

元料理を出すレストランの皆さん、現地を撮り続けているカメラマン、2つの国の大使館や協会の方など、現地に精通した方々にヒアリングを重ね、制作にご協力いただきました。

荻本：難しかったのは、政治的・宗教的に配慮が必要な部分が多かったことです。例えばモスクが描かれた絵札で遊ぶ、ましてやたたいて取るなんて絶対に駄目だという指摘など。思いも寄らない文化の違いに学ばされることも多かったですね。

種岡：それぞれの国で生きる人々がどんな楽しみや文化をもって暮らしているのかわることができたのは、とてもよい機会でした。

高橋：どちらもイスラム教の国で、シルクロードの文化が色濃く残されているので、布や食器などの模様がすごくきれいなんです。おかげでデザイン的にもすてきに仕上がりました。

絵札と読み札が合わさることで伝えられるものがある

—改めて、かるたの魅力というのとはどのような点にあると思いますか？

高橋：絵だけ、言葉だけ、ではなかなか伝わらないことが、2つ合わさると伝わる。それがかるたの魅力であり可能性でもあると思います。

荻本：遊び方自体はシンプルなので、いろんな世代と一緒に、熱くなって遊べるのも魅力です。大人に混ざると小さい子は札が取れなくて泣いてしまうこともよくあるのですが(笑)

種岡：でも、そういう場面になると、年上の子が小さい子に取らせてあげようと気遣う場面も見られるんですよ。日本語が分からない外国の子に日本の子が一生懸命ルールを伝えていたこともありました。そんなところも含めて、世代や言葉の壁を超えて遊べる良さを感じます。

国を超えたかるた作りで、世界の人たちと交流を！

—国際交流の視点では、どのようなかるたを作ってきましたか？



高橋有美

荻本和利

種岡祐子



プロフィール：左から高橋有美(たかはし・ゆみ) 制作会社を経営しながら、障害のある方たちと高円寺の阿波おどりを踊るなど地域活動にも尽力している。「杉並まちづくり交流協会」副会長も務める/荻本和利(おぎもと・かずとし) 本業はデザイナー。「すぎなみKarutaプロジェクト」代表のほか「杉並まちづくり交流協会」会長なども務めている/種岡祐子(たねおか・ゆうこ) 西荻窪にあるコミュニティスペース「まちナカ・コミュニティ西荻みなみ」理事。「杉並まちづくり交流協会」副会長も務め、まちづくりの地域活動を行っている。

※掲載のかるた等は「編集：内閣府東京オリンピック・パラリンピック推進本部事務局」。



高橋：ウズベキスタン、パキスタンかるたに関しては、来日した選手たちとの交流や、区民の方に2つの国を知ってもらうために役立てていきたいですね。遊びながら何か一つでもその国のことを覚えてくれたらいいなと期待しています。

種岡：かるたって、遊ぶことで初めてそこに込めた思いも情報も伝わり、魅力も味わえるものです。

荻本：制作過程も大事だけれど、できあがって遊んだ時にきちんと楽しめるものに仕上げることは重要で、僕らもそこをとても大切にしています。そういう意味でも、読み札が説明的になりすぎないように心掛けています。

—プロジェクトで今後チャレンジしていきたいことはありますか？

高橋：東京2020大会に向けた活動が一段落したら、私たちもまたスタートラインに立ち戻り次のステージに向かっていきたいです。今コロナ禍で、障害のある子どもたちも仲間と集う機会が非常に少なくなっています。かるたを通して、少しでもそんな場を増やしていければいいと思います。

荻本：これまでも、点字のかるた、色弱の人向けにカラーチャートを添えたかるた、車いすの人でも楽しめる傘を使ったかるたなど、さまざまなかるたに挑戦してきました。ゆくゆくは「ユニバーサルデザインかるた」と言えるものを作りたい。触ると気持ちいいとか、五感が喜ぶかるたなんていいアイデアを膨らませています。

種岡：五感に訴えるかるた、面白いかもしいですね。東京2020大会に向けて障害者交流・国際交流を掲げてきたけれど、この二本柱はそのままに、また別の視点から何か取り組んでいけるのではないかと楽しみにしています。



YouTubeで配信中!

紙面には掲載しきれなかった取材のこぼれ話も動画で紹介しています。

すぎなみビト MOVIE

すぎなみビト「すぎなみKarutaプロジェクト」のインタビューが動画でも楽しめます。右2次元コードからご覧いただけます。

杉並区公式チャンネル